

余白のデザイン：サキドリ研究 1学期の軌跡と分析

時間の再構築がもたらした「学び」と「組織」の変化

胆沢第一小学校 教育課程柔軟化サキドリ研究校事業 1学期実績報告

教育課程柔軟化のイメージ

従来の教育課程（隙間のない時間割）

	月	火	水	木	金
1					
2					
3					
4					
5					
6					

柔軟化した教育課程（意図的な余白）

柔軟化
→

	月	火	水	木	金
1	算数	国語	体育	音楽	道徳
2	算数	国語	体育	音楽	生活
3	算数	国語	体育	音楽	生活
4	算数	国語	体育	道徳	学活
5	算数		体育	生活	
6	算数		体育	学活	

裁量ア：どんぐりタイム
（児童の余白）

裁量イ：組織的研究活動
（教員の余白）

単なる時数の削減ではなく、児童の「個別最適な学び」と教員の「授業改善」のための意図的な余白を創出した。

裁量ア（どんぐりタイム）の活用状況

	基礎固め	課題克服	自己調整学習
低学年 (1・2年)	ひらがな練習, うつしまる	時計の見方	見学のお礼状作成
中学年 (3・4年)	漢字練習の反復	たし算と ひき算の筆算	テスト直し (ワークテスト)
高学年 (5・6年)	単元テストと テスト直し	自習・復習プリント (AIドリル活用)	国づくりへの歩み (社会科の探究)

学年が上がるにつれ、一斉のドリル学習から、AIドリルやテスト直しなど
『自己の課題に向き合う学習』へと質が変化している

裁量ア（どんぐりタイム）の具体的活用事例

基礎スキルの 確実な定着

1年生の「ひらがな練習・まとめテスト」、2年生の「漢字の学習・スイミーテスト」。授業内では確保しきれない反復練習をどんぐりタイムで補完。



評価と即時フ ィードバック

各学年で実施された「テスト直し」。特に3年生の「算数ワークテスト・テスト直し」、6年生の「たしかめようテスト」など、つまづきをそのままにしない時間を確保。



柔軟な発展・ 自己調整

6年生の「自習・復習プリントAIドリル」。児童自身がペースを握り、個別最適な学習環境を実現。



裁量イ（教師の研究時間）の戦略的活用

授業改善と 学力向上

全体構想（理論）
R7CRT分析
特別支援授業提案
国語・算数部会
論点整理学習会

健康づくり事業（岩手県文化スポーツ部スポーツ振興課）



危機管理と 児童の安全

エピペン研修
AED講習会
（奥州市消防署）
道路交通法講習会
（奥州警察署）



業務効率化と 働き方改革

通知表記入の仕方
（ICT支援員招聘）
学期反省会
職員会議

「外部講師（警察、消防、ICT支援員）を積極的に招聘し、
勤務時間内で質の高いインプットを実現」

裁量時間の有効活用と業務改善への寄与（アンケート結果）

85.7%

裁量ア（どんぐりタイム）の有効活用度

個別の補充指導やテスト直しに直結し、有効に機能。

（十分活用できた14.3% + 大体活用できた71.4%）

92.8%

裁量イ（組織的研究活動）の有効活用度

金曜午後の時間を確保したことで、充実した校内研や外部研修が実現。

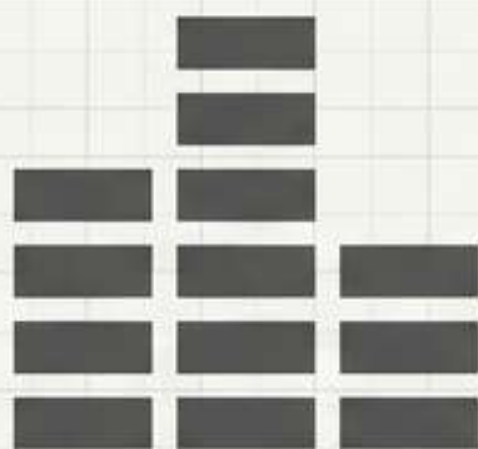
（十分活用できた35.7% + 大体活用できた57.1%）

57.1%

業務改善・授業改善への寄与

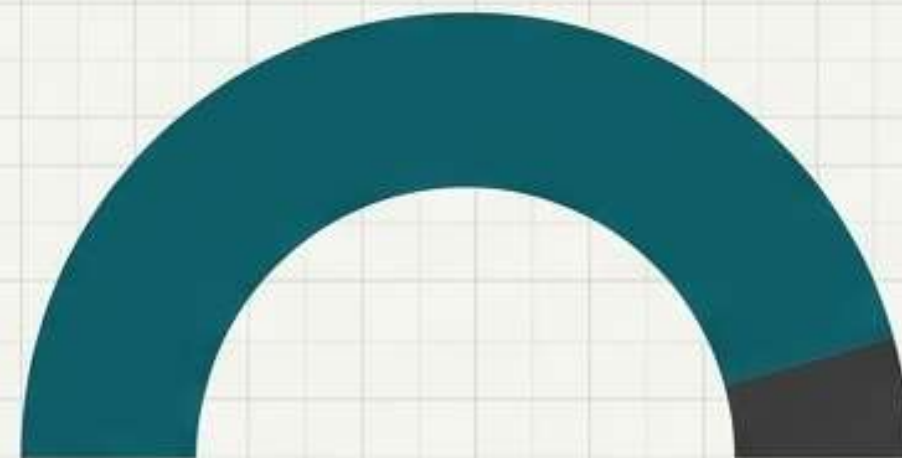
（十分に生かされている21.4% + 大体生かされている35.7%）

時数調整は「学びの質」を落とさない。 カリキュラムは計画通り進行。



終わらなかった教科の有無
11名が「無い」と回答

アンケート回答者のうち大半が計画通り進行
(国・理・生で各1名のみ遅れを指摘)。



学力低下への懸念
92.8% が「懸念なし」

(懸念がない21.4% + あまり懸念はない71.4%)。

児童の「ゆとり」

「金曜日が5時間授業になったことで、児童にはゆとりができたと思う」

「金曜日の下校が早まることで、月曜日の欠席数が減少傾向にあるように感じる」

50%の教員が児童の生活にゆとりができた実感。

教員の「協働と充実」

「共通理解を図り、各自、研究に取り組むことができた」

「児童を早く帰すことで、放課後の時間に余裕ができたと感じる」

業務改善に確かな手応え。
外部講師派遣など、学びの場として機能。

現場のリアルな声と課題（Reality Check）

課題①： 人的リソースの壁

「6時間目は支援員さんもいないなか、3学年のどんぐりタイムを調整するのが大変でした」



特定の学年・時間帯におけるサポート体制の偏りが負担増を招く懸念。

課題②： 金曜午後の疲労感

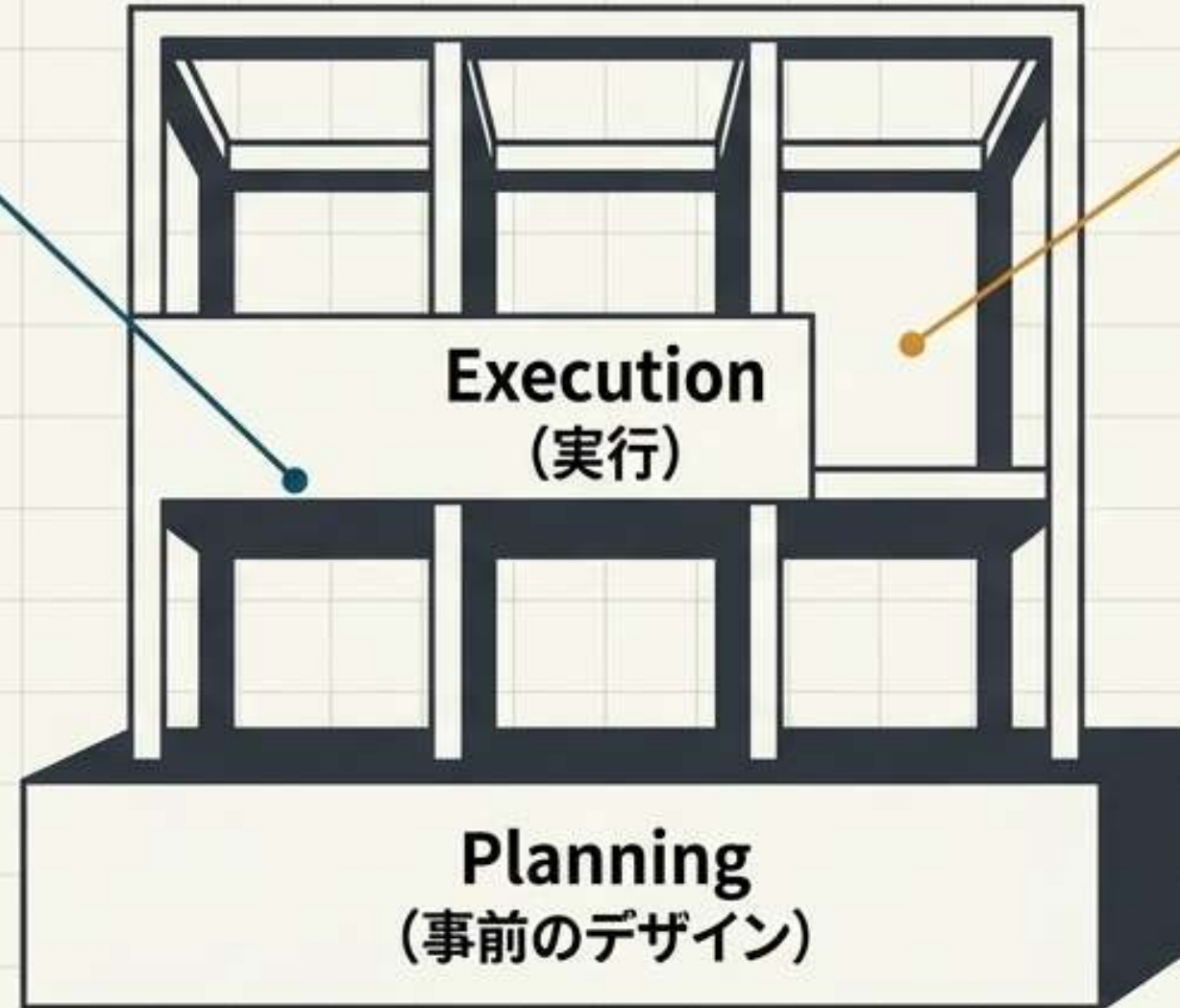
「金曜日に校内研があると、体力が持たないと感じた」
「準備したりする時間が取れず、苦しかった」



週末の蓄積疲労により、意図した「質の高い研究」のパフォーマンスが落ちるリスク。

計画性とねらいのズレ

「サキドリ研究ありきで授業を組んでいたところがあった」「活用状況がねらいと一致しているか振り返り、検証が必要」



時間を「埋める」リスク

「どんぐりタイムについて、正直なところ有効な活用のしかたがわからず戸惑っている」

Key Insight 余白(時間)を与えるだけでは機能しない。

見通しを持った計画的なカリキュラム・マネジメント(事前のデザイン)が不可欠である。

2学期への展望：課題をアクションへ

「どんぐりタイム」 の高度化

諸調査の結果と結び付け、児童の実態に合わせた計画的な運用への移行（単なるドリルから真の自己調整学習へ）。

研修デザインの最適化

金曜日の疲労感を考慮した研修の配置。公務支援システムの活用など、実務直結型の「メリットを感じる！」研修のハイブリッド化。

リソースの再配置

支援員不在時間のフォローアップ体制の構築と、全校体制での見守りの仕組み化。

「余白」は、次世代の学びを支える土台となる。



1. 1学期の試行を通じ、時数調整が「学力低下」を招かず、「意図的な学びと成長の時間」を生み出せることを実証した。
2. 現場の戸惑いや疲労感というリアルな課題は、次期学習指導要領（2030年）を見据えた先駆的な「知見」である。
3. 2学期は、この「与えられた余白」を「自らデザインする空間」へと進化させる。